Welcome Back!

さくらクォータリー・レビュー

The Sakura Quarterly Review

順天堂大学さくらキャンパス図書新聞

Volume 5. Summer 2023

BOOK & FILM REVIEW

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー 』

ブレイディ・みかこ　著
（2019年、新潮社）

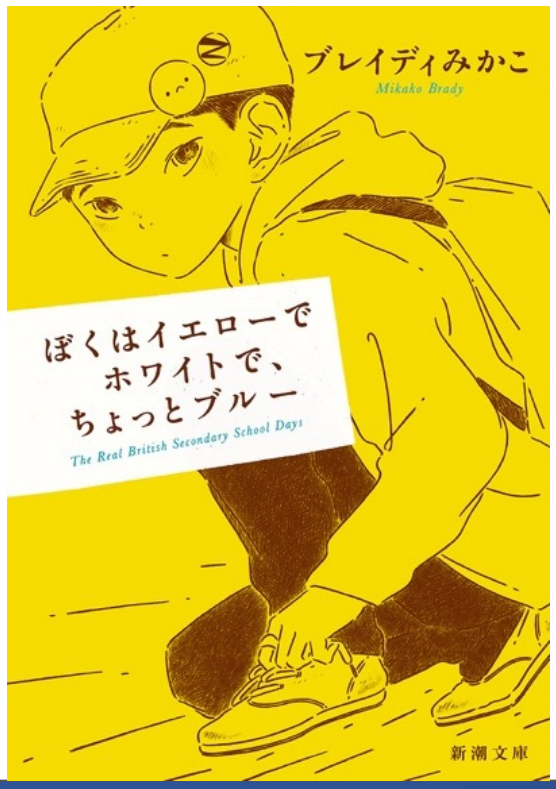
この本の著者であるブレイディ・みかこさんは、今活躍するイギリス在住のライター・コラムニストである。1996年に渡英し、ロンドンの金融街シティの銀行員から大型トラックの運転手に転職した男性と出会い結婚。イギリスの南端にあるブライトンという港町に、息子一人を含めた三人家族で暮らしている。ブレイディさんは、ロンドンの日系企業に数年勤務した後、イギリスで保育士の資格を取り、「最底辺保育所」で働いた。そのリアルな経験をもとに、イギリス社会が抱える格差や分断を、堅苦しくない、わかりやすい文体と鋭い感性で、日本人の読者に伝えてきた。

この『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という印象的なタイトルは、実はブレイディさんの息子がノートの端に書いていた落書きを、そのまま借用している。「ブルー(blue)」は「気持ちが塞ぎ込んでいる」という意味であるが、この「ちょっとブルー」を書いた彼の心情はどのようだったのだろうかと我々は思い巡らすことになる。息子は、日本でいう「ハーフ」であり、執筆時は中学一年生である。息子は、カトリックの上品な小学校に通っていたが、中学校は、本人の意志で、近所にある「元底辺中学校」に進学した。この本は、そんな息子の中学校生活の成長記録でもある。

イギリスにおける「元底辺中学校」の学校生活は、日本の学校生活と異なる点が多く、驚きの連続である。中学校の音楽室にはUKロックのアルバム・ジャケットが壁にずらりと並び、クリスマス・コンサートにはラップ。ハンガリー移民を両親にもつにもかかわらず、移民の差別発言をするクラスメイト。中学校対抗水泳競技大会では、プールサイドは、リッチな「私立校」のガラガラのプールサイド、「缶詰のイワシのように」溢れかえる「公立」のプールサイドにわかれており、学校生活を通して、イギリス社会における階級の縮図が描かれている。

近年のEU離脱からもわかるように、移民大国イギリスの「多様性」が抱える複雑さと難しさを本書は鋭く分析しているのだが、読み終わったあとの感覚はどこか清々しい。この本の視点は息子。イギリス社会の問題をリアルに見て、肌で感じている「ぼく」は、まだまだ「未熟」で「経験が足りない」のだけれども、異なる境遇の他者を想像し、理解しようと努力している。本書ではそれを「誰かの靴を履いてみること」＝「エンパシー(empathy)」であると表現している。「ちょっとブルー」だった「ぼく」のカラーは成長の過程で、どんどん変わっていく。ブレイディさんの優しい人柄と息子のみずみずしい感性が、読んでいて心地よいし、勇気づけられる。多くの人が楽しめる一冊だと思う。

（スポーツ健康科学部 助教　廣瀬絵美）



『大富豪からの手紙』
本田　健 著
（2018年、ダイヤモンド社）

「大富豪」この言葉を聞いてどのようなイメージが沸くだろうか。お金持ち、お城のような家、高級食材の食事、とても華やかな暮らしがイメージできる。もし、親や祖父母が大富豪だったら、どんな生活を送れたのだろう。誰しもが一度は考えたのではないか。しかし、親や祖父母の遺産や力で、裕福な生活を送ることが幸せなのか。本当の幸せとはどのようなものなのか。

この本では、人生の真実を探す旅が書かれている。この話に登場する僕（佐藤敬）には、大富豪だった祖父がいた。祖父は、他界する際にすべての遺産を「奨学財団」に寄付していた。孫の敬には、お金ではなく九つの手紙を残していた。この九つの手紙がこの物語のキーとなってくるのだ。祖父から残された最初の手紙には、「孫の君たちにも、財産と呼べるようなものを何も残さなかった。その代わりに残すものは、人生でいちばん大切なものを学ぶ機会だ。」と書かれていた。そして、第一の手紙「偶然」、第二の手紙「決断」、第三の手紙「直観」、第四の手紙「行動」、第五の手紙「お金」、第六の手紙「仕事」、第七の手紙「失敗」、第八の手紙「人間関係」、第九の手紙「運命」と九つの手紙があった。これらは孤児だった祖父が億万長者になるまでの80年間に得た「人生のエッセイ」であった。敬は、第一の手紙「偶然」を読んでから行動をおこし、何かに直面した時・ここだというときに次の手紙を読み、学び成長していく。そして、最後には「本当の幸せ」「人生の真実」を彼なりに見つけるのだ。

私はこの本を読んだとき、とても身近に感じるものがあった。登場する話や状況が、これまでの人生で何度も体験していたことだったからだ。なんとなくしかとらえていなかったものに、目をむけるいい機会となった。この本の中で、私が一番印象にのこっている手紙は、第三の手紙「直観」である。私は、これまでの人生において直観で物事を判断することが多くあった。そのため、この手紙には大変興味が沸いていた。実際に読むと「理性ではよくわからないときでも、心と体で得た直観に、人生をゆだねる勇気をもつこと。」これが大切と書かれていて、大変共感できた。しかし、私は直観を信じて失敗したなと思うこともたくさんあった。読み進めていくと、「一時的には失敗したかもしれないと思ったこともあるが、後から振り返ればその決断が間違っていなかったということばかりだ」と書かれていた。さらには、第七の手紙「失敗」で「失敗とはうまくいっていない時点であきらめることをいう」という一文があった。これを読んだときに、私は直観で動いて失敗したなと思うことをやめた。そこで、止まるのではなく何か得られるものを探し、行動しようと考えるようになった。

このようにこの本は、実際の体験談と照らし合わせながら読む面白さと、そこから自分の人生につながる何かを学べるものとなっている。自分自身の考え方を見返したいとき、物事の捉え方を変えてみたいとき、一歩踏み出したいときに読んでみてはどうだろうか。

（2022年度スポーツ健康科学部 卒業　古賀大晴）

『図書館奇譚』

村上春樹 著
（2014年、新潮社）

2018年初夏、さくらキャンパス図書館一階の書庫へつづく薄暗い階段を降りながら「これは、図書館奇譚の入口だ！」と一人興奮した当時を回想しつつ、この書評を書いています。

「図書館奇譚」は村上春樹の初期短編集『カンガルー日和』に収録されていた作品の一つで、1時間もかからずに読み終えてしまう短さです。私が初めて読んだのは高校生の時でした。家族全員眠っている深夜に一人だけ覚醒していると気付いた時のような不安と高揚感を感じながら一気に読み進め、ハッピーエンドでもバッドエンドでもない独特の読後感に困惑したものです。『カンガルー日和』に収録されていた他の短編についてはすっかり忘れてしまいましたが、「図書館奇譚」だけはいつまでも記憶の片隅にあって、古い建物の薄暗い階段を見下ろした時などに思い出してしまう。私にとって村上作品で真っ先に頭に浮かぶのは『ノルウェイの森』でも『1Q84』でもなく、「図書館奇譚」です。

読書好きな友人に『図書館奇譚』の話をしても「村上作品にそんなのあったっけ？」と返されることも多く、もしかしたら自分が読んだことすら夢だったか？と思っていた矢先、2014年に新潮社から表題作のみ収録された改訂版が刊行されていました。新しく追加されたドイツのカット・メンシックの挿絵も不条理な出来事が起こる夜の雰囲気にぴったりです。帯には「不条理に満ちた大人の童話がダークに蘇る」とありますが、確かにグリム童話を想起させる種類の薄暗さがあるかもしれません。

主人公の「ぼく」は「必要以上にしんとしていた」図書館で、無愛想なカウンターの女性司書の指示に従い、本を探しに地下書庫へと続く階段を降りていきます。

探していた本は禁帯出だから館内で読むようにと告げる目の前の老人に言われるまま、さらに奥の読書室へと導かれ、主人公は帰宅時間を気にしながらも断ることができません。背後で鍵をかける音に気付き慌てるが、指定された本を読み終わらなければ外に出ることはできないと監禁されてしまう。心配性の母親やペットの小鳥を気にしながらも、はっきりと断る勇気がない主人公は図書館の地下で読書を継続し、老人に暴力を振るわれている羊男の差し入れのドーナツを頬張ったり、月夜に現れる謎の美少女と交流しながら脱出を試みます。最終的にどうなるのかは、ここでは書きませんが、興味を持った方はぜひ読んでみてください。

最後に、個人的に好きなくだりを一つご紹介しましょう。主人公が老人の指示通り本を全て読み終えたら脳みそを吸われてしまうと知って、それはどんな感じなのか羊男に恐る恐る質問するところです。

「うん、そうだね、思っているほど悪くはないもんだよ。ちょうどね、頭の中に絡まった糸をつうっと抜かれるような気分らしいよ。何しろもう一度やってほしいっていう人もいたくらいだからね。」

試験前に大量の情報を詰め込んで頭が飽和状態になったら、つうっと糸が抜かれる状態をイメージしてみるのも良いかもしれません。

（スポーツ健康科学部　庄子ひとみ）

本をめぐる旅　第5回

メディアセンターは宝の山！

イギリスの体育教育学の雑誌と出会う。

ACTION（British journal of physical education）

＊現在は廃刊London : Physical Education Association of Great Britain and Ireland

メディアセンター入口がある2階や3階を利用しても、薄暗い階段を降りて一階の書庫に入るのは躊躇している学生も多いのではないでしょうか。しかしここは、探検しがいのある、宝の山です！大学図書館だからこそアクセスできる、国内外の貴重な資料が空調管理された書庫の中で貴方を待っております。

とりあえず今回はイギリスの古い体育教育学の学術誌を見てみましょう。*ACTION*（1980年11月号）です。雑誌ですので紙質も上質とは言えず、そのまま保管されたら気軽に参照できないくらい劣化してしまいます。一般に読み捨てられる運命にある定期刊行物ですが、資料として長期保管に耐えられるよう、数冊まとめて丁寧に綴じられていることがありがたい。

本文だけではなくスポーツ用品メーカーの広告やキャンペーンも新鮮で、タイムトリップしたような感覚になります。その中で目を引いたのが、一瞬ドキッとするこの表紙。

？マークが描かれた薬瓶と注射器。添えられた文章にはDrugs: the unacceptable face of sporting excellenceとあります。スポーツの素晴らしい結果や栄光の影に、決して許容できない禁止薬物使用が認められる可能性、不気味な危機感を示唆するようなイラストです。

WADAが設立されたのは1999年ですが、1980年のこのジャーナルでは既に、アスリートのドーピング問題について活発なディスカッションが行われています。Russ Flemingによる特集では、映画『ゴールデンガール』(1979)に出てくるヒロインが陸上競技における成果主義の狂気に振り回されホルモン投与を重ねる姿を提示しながら、ドーピング行為という非人間的な行為を糾弾しています。さらに英国内でのアンチ・ドラッグ運動をもっと推進し、チェルシー・カレッジで実施されている特定の禁止薬物検知方法の開発に対する助成金を増やすよう提言もしています。

このように、書庫巡りは自分の研究分野に直接関係がなくても、気軽に興味が赴くままに古い冊子や資料をパラパラとページをめくって出会う面白さも潜んでいます。これから暑い夏がやってきますが、空調も効いて古い資料が快適な空間は、我々人間にとってもひんやりと快適です。（前頁で紹介している村上春樹の『図書館奇譚』の世界のように、閉じ込められ読書が終わったら脳みそをちゅうちゅうと吸われる心配もないはずです。）最後に、電動書架は退出する時に必ず電源切ってくださいね。

（スポーツ健康科学部　庄子ひとみ）

編集後記：ご寄稿くださった皆様、ありがとうございました。長いブランクを経ての再開です。次の号はまだなのか？という問い合わせにやっと応えることが出来ました。学生、職員、教員の皆様からの積極的な提案や投稿、お待ちしております！

学術メディアセンター

平日夜間・土曜午後の開館を再開しました。
平日　9:00～21:40
土曜　9:00~19:00

詳細はHPご確認ください。
https://www.juntendo.ac.jp/about/org/library/sakura/

原稿募集！

おすすめの本や映画をぜひ紹介してください。新刊/新作である必要はありません。原稿はWordファイルで作成し、hi-shoji@juntendo.ac.jp　さくらクォータリー・レビュー編集部(庄子ひとみ研究室) 宛に添付ファイルで送信してください。